

狛江の教育21研究報告書

狛江市教育委員会 教育長 柏原 聖子

今、学校には、確かな学力、豊かな人間性、健康・体力をバランスよく育てることに加え、激しい変化が進む時代にあってもよりよい人生や社会を自ら創り出すことができる子どもたちを育てる質の高い教育の実践が求められています。

そして、子どもたちに社会の変化に対応する力をはぐくむため、狛江市教育委員会では「第3期狛江市教育振興基本計画」の基本方針（1）「生きる力をはぐくむ質の高い学校教育の推進」の施策②に「生涯に渡って生きて働く力の育成」を掲げています。

狛江第一中学校では「関わり合い 認め合い 未来を拓く 一中生～社会に開かれた教育課程を実現するカリキュラム・マネジメントの充実～」を研究主題として自尊感情を高め、自ら考えて行動できる生徒を育成するため、実体験や様々な経験を積む活動や教科横断的な指導、話し合い活動の充実を図るための指導方法の研究を積み重ねてこられました。その成果は、各学校のカリキュラム・マネジメントの充実に寄与するものです。

本校の生徒が課題に対して、自ら考え判断し実行したり、他者と折り合いをつけながら力を合わせて解決したりすることで得た学びを礎とし、将来、社会を創る担い手として活躍することを願っています。

結びに、本校の研究に対して温かく御指導いただきました東京学芸大学教職大学院准教授 浅野 あい子 先生をはじめ、御支援いただきました皆様方に心より感謝を申し上げますとともに、日々の実践を大切にされながら研究を積み重ねてこられました狛江第一中学校長 吉田 知弘 先生、教職員の皆様のたゆまぬ努力に敬意を表し、あいさついたします。

狛江市立狛江第一中学校長 吉田 知弘

本校は平成31年度・令和2年度・3年度の3年間、狛江市教育委員会より「狛江の教育21研究協力校」の指定を受け、「関わり合い 認め合い 未来を拓く 一中生～社会に開かれた教育課程を実現するカリキュラム・マネジメントの充実～」を研究主題として、全教員で研究を進めてきました。

本来は2年間である研究期間がコロナ禍の影響により3年間に延長されました。しかし、研究2年目の令和2年度は臨時休校や分散登校の期間もあり、また通常授業であっても生徒同士の話し合い活動やグループ活動などはなかなか行えず、思うように研究を進められない時期もありました。しかし、こういった時期でもカリキュラム・マネジメントの一つの視点である「外部人材・資源の活用」を図るための「外部人材活用カレンダー」を作成したり、また「1単位時間授業でのPDCAサイクルの確立」を推進していくために校内で「授業を見合おう週間」を設定したりして、できることからの実践を積み重ねてきました。本研究を通して「育てたい生徒像」（中学を卒業するときに身に付けておいて欲しい力）である「自尊感情を高め、自ら考えて行動できる生徒」に迫るために、『一中スタンダード』を作成し、全教職員で共通認識を図って意図的・計画的な指導を実践していくこともその一つです。本校の研究実践やその成果、課題などが各学校での「カリキュラム・マネジメントの確立」にお役立ただけであればたいへん嬉しく思います。

結びに、研究の推進にあたりまして、3年間という長きにわたり講師をお引き受けくださいました東京学芸大学教職大学院准教授 浅野 あい子様を中心に心より感謝申し上げますとともに、本校教員とともにたくさんの授業を作り上げてくださった外部講師の皆様方をはじめ、ご指導、ご助言をいただきました多くの皆様方や貴重な研究機会を与えてくださいました狛江市教育委員会に深く感謝申し上げます。

関わり合い 認め合い 未来を拓く 一中生 ～ 社会に開かれた教育課程を実現するカリキュラム・マネジメントの充実 ～

(1) 研究主題設定の理由

これから迎える変化の激しい時代を生き抜く生徒には、知識及び技能の習得のみならず、他者と協力・協働しながら課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等及び学びに向かう力、人間性等を育むことが求められている。生徒にこうした資質・能力を育成していくために、主体的・対話的で深い学びを実現できるよう授業改善に取り組む必要がある。そこで、すべての教職員の参加による、教育課程の編成、実施、評価、改善を通して、関わり合い認め合うための手立てを中心としたカリキュラム・マネジメントの充実を研究主題として設定した。本研究では、「教科横断的な指導」「外部人材の活用」「評価の改善」という三つの視点に基づき、教育課程を軸に学校教育を改善・充実することを目指す。

育てたい生徒像

自尊感情を高め、自ら考えて行動できる生徒 ～ 社会に出たときに必要な力を身に付けさせるために ～

(2) 育てたい生徒像設定理由

本校生徒の課題として、「自分で考えて行動する力」「自信をもってチャレンジする姿勢」が挙げられる。これらの力は中学校を卒業し、社会に出ていくために必要な力になってくる。関わり合い、認め合う経験を通して自尊感情を高めることで、様々なことに挑戦したり、自らの考えや行動を深くまで追求できたりする。また、自ら考え行動することで得られた達成感や充足感を積み重ねることによって、自尊感情を高めていくことができる。この良い循環の中で一中生を育むことにより、社会に出たときに、自信をもって未知の物事に取り組むことができると考える。

(3) 研究仮説

「教科横断的な指導」「外部人材の活用」「評価の改善」の三つの視点に基づいたカリキュラム・マネジメントの中で、生徒が実体験や経験を積む活動、教員が教科横断的な指導を行うことで自ら考えて行動する力を育むことができると考えた。また、話し合い活動などで互いに認め合えた時や発表をしたり、自分の考えを表現できたときに自尊感情を高められると考えた。これらの活動を意図的に行うために、一中スタンダードという共通の授業改善の手立てを作成し、実践した。



【研究構想図】

学校経営計画

- ① 生徒に自らの将来の生き方を考えさせ、夢をもたせる。
- ② 生徒の自尊感情を高める。
- ③ 学力の基礎・基本、基本的な生活習慣など「基本」となる力を着実に定着させることで、卒業後も自らの人生を自信をもって生きていく力を身に付けさせる。
- ④ 夢や希望をかなえていくために様々なことにチャレンジし努力していくことを通して成長させる。
- ⑤ ふるさと狛江・狛江一中を誇りに思う気持ちを育てる。

研究主題

関わり合い 認め合い 未来を拓く 一中生
～ 社会に開かれた教育課程を実現するカリキュラム・マネジメントの充実～

育てたい生徒像

自尊感情を高め、自ら考えて行動できる生徒
～ 社会に出たときに必要な力を身に付けさせるために～

研究仮説

実体験や経験を積む活動、教科横断的な指導を行うことで自ら考えて行動する力を育むことができると思った。
また、話し合い活動などで互いに認め合えた時や準備をしてきて発表をしたり、自分の考えを表現できたりしたときに自尊感情を高められると思った。

実

カリキュラム・マネジメントの三つの柱

教科横断的な指導

外部人材の活用

評価の改善

践

研究実践【一中スタンダード】

- ① 本時のねらいを提示 (生徒が自ら学ぶための環境をつくる)
- ② 次につながる言葉がけ (ほめる・認める場面から自尊感情を高める)
- ③ 考えを深める発問 (動機付け、探求心の向上を行い、自ら考える力を高める)
- ④ 考えを表現する場面の設定、ツールの工夫 (生徒の考えや意見を出しやすくする)

検証

QUアンケート、全国学力学習状況調査、狛江市学習状況調査、生徒アンケート など

改善

検証授業Ⅰ（評価の改善）



ア 教科「家庭」

題材名 第2学年「住生活の自立」

イ 本授業を通して身に付けさせたい力・育てたい生徒像

家庭内事故にはどのようなものがあるかを知ることにより、一人ひとりが自身の問題として意識することで、家族の安全を考えながら過ごせる力を身に付けることができる。また、付箋を用いて全員が自らの考えを表現できるようにすることで、自尊感情を高めていきたい。

ウ 本時における研究実践の手立てや工夫

付箋を活用し、生徒全員が自らの考えを黒板に掲示したポスターに貼ることで、自らの考えをまとめ、主体的に学習に取り組むように工夫を行った。また、発表することが苦手な生徒に対しては、付箋を見ながら教師がほめたり、認めたり、価値付けを行うことで、付箋を活用して考えを表現することができた生徒の自尊感情を高める工夫を行った。



エ 成果と課題

(成果) 普段、発言が少ない生徒も、付箋で気軽に自らの考えを表現できたことで、学習に主体的に取り組む様子が見られ、自尊感情の高まりを感じることができた。また、自宅で家庭内事故が起こることを全く想定していなかった生徒が、互いの考えを共有する活動を通して、互いに関わり合い、それぞれの考えを認め合うことで、家庭内事故の防ぎ方や家族の安全を考えた住空間の整え方について考えを広げることができた。

(課題) たくさんの気づきがあった生徒に対しては、配布した枚数によって、考えが制限されることがあった。また、付箋を通した表現にとどまってしまう、なぜそう思ったかなどの考えを深める活動が少なくなったので、目的に応じて表現ツールの使い分けが必要であると感じた。



検証授業Ⅱ（評価の改善）



ア 教科「数学」

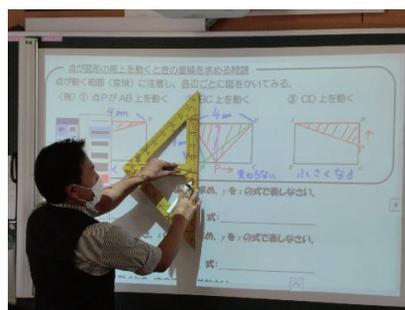
単元名 第2学年「1次関数と図形」

イ 本授業を通して身に付けさせたい力・育てたい生徒像

具体的な事象の中の二つの数量の関係を考えていくうえで、図形の中で変化した状況を変域として捉えて場合分けするという力が大切である。その変化の様子をタブレットやプロジェクターで視覚的に分かりやすく示すことで、課題をよりイメージしやすくし、生徒が自ら考えて課題に取り組めるようにしていきたい。

ウ 本時における研究実践の手立てや工夫

図形の中で点Pが移動することで、面積を求めるための式が x の値によって変化することを、プロジェクターで視覚的に示すことで図形の変化や変域との関係に気付かせる工夫を行った。また、生徒が自ら考え、課題に取り組んだ結果だけでなく、学習過程を教師が個別に評価することで、達成感や充足感を感じることができるようにした。



エ 成果と課題

(成果) 少人数授業であることの良さである、生徒個別への対応を丁寧に行うことにより、生徒の課題への取組に対しての評価を行うことができた。また、教え合いの場では、プロジェクターで示した図を利用しながら、互いに関わり合い、課題に取り組んでいる様子が見られた。

(課題) 図をタブレット端末やプロジェクター等、ICTを活用して生徒に示すことは効果的であったが、その教材を作るためには、専門的な知識や技術が必要になってくる。また、それぞれの課題に対する取組の内容や時間は、習熟度に合わせ、より生徒に適したものを準備する必要がある。そのため、毎時間の生徒の知識・技能の定着状況を理解するための細かな評価方法の工夫が必要となってくる。



検証授業Ⅲ（評価の改善）

ア 教科「数学」（発展コース）

単元名 第3学年「平方根」



イ 本授業を通して身に付けさせたい力・育てたい生徒像

「考える力（考え続ける力）」、要するに「数学的思考力」を育てることを目的とし、様々な視点から具体的、総合的に判断し、解法に向けて段階的に考えられる力を身に付けさせたい。また、その思考過程や結果について、自ら表現できる力を身に付けることで、達成感や充足感を感じさせたい。

ウ 本時における研究実践の手立てや工夫

課題を段階的に解決する中で自信を付けさせるために、前時の授業内容の確認をするとともに、同じ内容でも条件を変えた場合や、既習学習を利用して考えを深める内容などを課題として提示する工夫を行った。また、考えることが滞りそうなときは、適切なヒントを提示したり、他者との関わりの中で、生徒自らの力で課題を解決する経験を多く設定し、次の課題にチャレンジする姿勢を養うようにした



エ 成果と課題

（成果） 新しい課題に対して、一人で考えを深めたり、複数人で考えを深めたりして、自ら考えた解法を確かめている様子が見られた。また、ヒントを得ながらも、様々な見方や知識から解法に向かうことができる楽しさを感じていたことで、次の課題につながっていくと考えられた。

（課題） 毎時間、生徒が自ら考えたいくなるような課題を提示するためには、生徒の基礎的な知識や技能の習熟度を把握しなければならないので、毎時間の評価の在り方を考えなければならない。また、「できる楽しさ」と「考える楽しさ」の課題の違いについては、十分考えておかなければならない。



検証授業Ⅳ（評価の改善）

ア 教科「英語」（特別支援学級）

単元名 第1・2・3学年

「行きたい国や地域・I want to go to ～.」



イ 本授業を通して身に付けさせたい力・育てたい生徒像

多くの人との関わり合いの中で、学んだことを主体的に表現し、互いに認め合える力を身に付けさせたい。また、自分の気持ちを表現する活動やクラスメイトのスピーチを聞く活動を通して、英語を話す楽しさや喜びを感じながら、様々なことにチャレンジできる姿勢を養っていききたい。

ウ 本時における研究実践の手立てや工夫

前時の復習や学習内容の定着のために ICT を活用し、簡単なクイズ形式の問題に取り組み、自信を付けさせるようにした。また、クラスメイトのスピーチ動画に対する返信動画を作成することで、生徒同士の認め合う活動を活発化させ、自尊感情を高めていく工夫を行った。



エ 成果と課題

（成果） ICT の活用により、生徒一人ひとりが主体的に活動に取り組むことができた。普段、大きな声で発表できない生徒が、スピーチ動画では堂々と発表することができていた。また、返信された動画を嬉しそうに見ていた生徒の様子から、自尊感情の高まりを感じられた。

（課題） 実際に対面して行う2方向の関わり合いの活動と ICT を活用した1方向の関わり合いの活動をバランス良く組み合わせて、目的に応じた授業を展開させていくが課題である。それぞれの良さを理解しながら、生徒同士の認め合いの活動をさらに充実させる必要がある



検証授業Ⅴ（外部人材の活用）

ア 教科「美術」

題材名 第1学年「絵手紙教室」



イ 本授業を通して身に付けさせたい力・育てたい生徒像

狛江市は絵手紙発祥の地として知られており、絵手紙による街づくりの推進を図っている。絵手紙独自の「ヘタでいい、ヘタがいい」という考え方をはじめ、筆の扱い方や画材の素材感など、本授業は通常の授業では味わうことのできない取組である。また、身近な題材を用いて、自分の思いや感じたことを伝える経験を通じて、自ら思考し活動することに自信をもって、表現活動に取り組める生徒を育てたい。

ウ 本時における研究実践の手立てや工夫

生徒に自らの将来の生き方を考えさせ、夢をもたせるために「本物」に触れ、経験させるという視点に立ち、狛江市文化振興事業団からゲストティーチャーを招き、外部人材の活用を行った。



エ 成果と課題

(成果) 狛江市の文化「絵手紙」の取組を大切に、それを伝え繋いでいこうとしているゲストティーチャーの指導や言葉はとても説得力があり、また挑戦してみたいという意欲につながった。また、ふるさと狛江を誇りに思う気持ちを育てる取組となった。

(課題) 地域と連携し、文化的事業として継続していく基盤を作っていくことが今後の課題と言える。本校の研究の取組の一つ、カリキュラム・マネジメント上の外部人材カレンダーを活用し、学校全体で共有していく活動にしていきたい。



検証授業Ⅵ（教科横断的な指導）



ア 教科「道徳科」

教材名 第3学年 B-(7) 礼儀「出迎え三步、見送り七歩」

イ 本授業を通して身に付けさせたい力・育てたい生徒像

体験的な学習を基盤とし、自分たちの考える出迎えと見送りの仕方を班で議論させ、実際に役割演技して感じたことや考えたことから、主体的に取り組む態度を育てたい。また、日本に息づく「おもてなしの心」とはどんなことかを再発見させることで、礼儀の奥深さを捉えさせ、普段の生活に生かせるような道徳的実践意欲の高い生徒を育てたい。

ウ 本時における研究実践の手立てや工夫

教科横断的な指導の観点から、①コラムを活用した国語科との関連や修学旅行を目前に控えた時期に、②日本の伝統や文化について学ぶ総合的な学習の時間とのつながりを踏まえた実践方法を工夫した。実際の自分の行動に生かせるよう自分事として考えられる発問を設定した。



エ 成果と課題

(成果) もともとある知識や情報がつながり、発問や生徒の発言がよくつながって、授業をスムーズに、そして幅広く展開することができた。東京2020オリンピック・パラリンピックの“おもてなし”とも相まって、自分事として日本の伝統や文化について深く考えさせることができた。

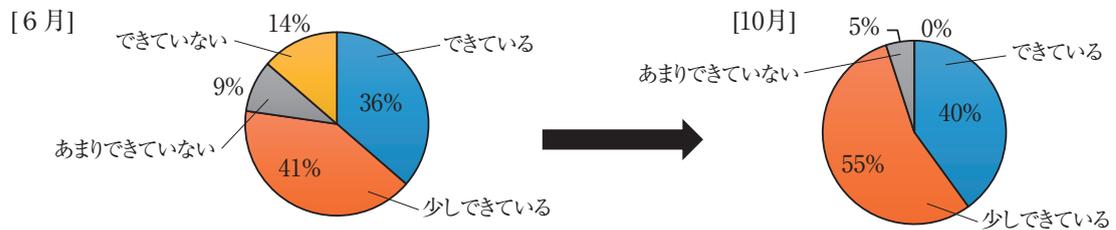
(課題) 道徳の教材、国語科のコラム、総合的な学習の時間で扱う修学旅行と、考える視点が多岐に渡ったため、発問の順番や質を熟考しないと生徒の思考が止まったり、混乱してしまったりすることがあった。議論することや自己内省を段階的にさせられるような工夫が必要である。



【研究の成果】

今年度、6月と10月に生徒、教員向けにアンケートを実施した。その結果から、研究の取組を通して、次のような変容が見られた。

まず、研修に関する教員アンケートより、すべての項目について、ポイントが上がった。特に研究テーマでも「カリキュラム・マネジメントを意識した授業を行っている」という項目について以下の結果を得た。



これより、すべての教員が研究実践を意識して授業を行った結果であると考えられる。特に、「できている」、「少しできている」に属する割合が「主体的な学びが実現できている」という項目では81%から100%、「対話的な学びが実現できている」という項目では91%から100%となり、授業改善について大きな変容が見られた。



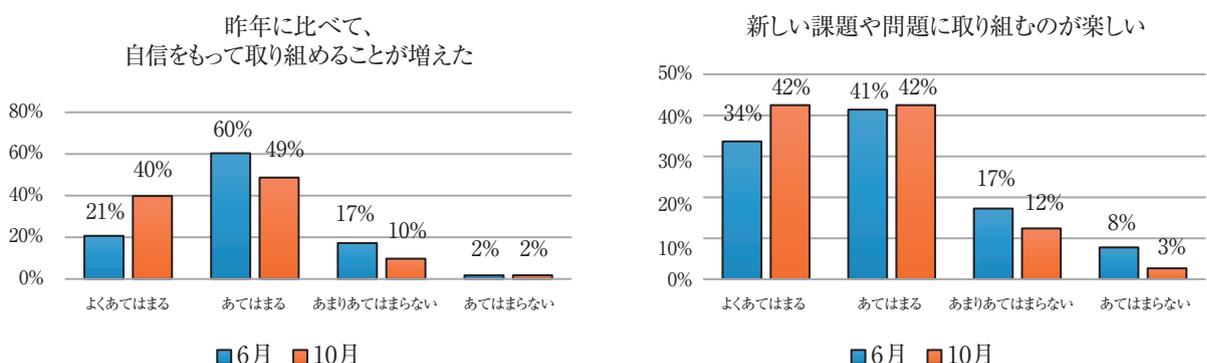
また、単元や一単位時間の授業において、一中スタンダードの視点に基づいた検証授業を行った。その結果、次のような成果を得た。

- 1 教員アンケート（6月、10月実施）よりどの項目も研修のねらいを明確に示し、授業改善に努めたことが分かる。「学習のねらいの提示」は90%実施できており、教員も取り組みやすいものであったと考えられた。

「主体的な学びの実現」「対話的な学びの実現」は「あまりできなかった」「できていない」という回答は0%であり、学習指導要領の改訂、GIGA スクール構想と合わせて、社会に開かれた教育課程を実現するカリキュラム・マネジメントの充実に向けての成果につながった。

- 2 「研修会」では教員のグループ活動を通して、実践の検証を行った。課題を見付け、良さを取り入れようと、全教員が一丸となって「育てたい生徒像」「一中スタンダード」を徹底することができたことは大きな成果であった。

また、生徒の変容としては、以下の項目で大きな変容が見られた。



「昨年と比べて、自信をもって取り組めることが増えた」の項目の「よくあてはまる」が21%から40%に増加し、また「新しい課題や問題に取り組むのが楽しい」の項目の「よくあてはまる」が34%から42%に増加した。教員の変容から見られた「主体的な学びが実現できている」「対話的な学びが実現できている」という結果が、これらの生徒の変容につながってきていると考えられた。

生徒が与えられた課題ではなく、自ら課題を見付け、その課題に向き合うことで意欲的に活動できていた。その結果、新しい課題に取り組む楽しさを感じることができている姿が多く見られた。また、対話を通して自分の考えが認められたり、他者の考えを聞き、自分の考えを広げたりする経験を通して、考えることや表現することに対して、自信を付けることができた。

教員側が意図して行った指導の積み重ねが、生徒の自信や探求心を向上させるとともに、学習の場だけに留まらず、生徒の様々な活動につながっていると感じた。



【今後の課題】

本研究で明らかになった課題は、以下のとおりである。

1 言語活動の充実を図る必要がある。

生徒アンケートからは、「自分の考えや意見を表現できる機会がある」や「話し合い活動をする機会がある」ことに約8割近い生徒が「あてはまる」と肯定的に回答している。一方で、「人と違っていても正しいと思うことは主張できる」に「とてもあてはまる」と回答した生徒は約3割となっている。このことから、生徒は対話的な活動の機会が増え、関わり合いの場面では自身の考えや意見を表現できるようになったが、自分の意見に自信をもちきれなかったり、相手の反応を気にして、自分の考えが主張できない等、認め合いに難しさを感じていることが推察される。

自分の意見に自信をもたせ、相手の考えを受け止め、よりよい考えになるような話し合いができるように言語活動の充実を図っていくことが課題の一つである。

2 新たな課題に対して、解決を図ろうとする態度の、一層の醸成を図る必要がある。

生徒アンケートからは、「新しい課題や問題に取り組むのが楽しい」ことに、約8割の生徒が「あてはまる」と回答している。新学習指導要領による、課題解決型の授業構成が浸透してきた結果、生徒が課題を解決していく授業に、学ぶ楽しさや取り組むことへの面白さを感じているが、その一方で、設定される課題に難しさを感じる生徒も少なくない。生徒アンケートによると「自分はダメだなと落ち込むことがある」と回答した生徒が約9割もおり、学ぶ楽しさがある一方で、取り組むことで落ち込む場面もあったことが見て取れた。

このことから、教員が生徒の実態に即して課題を設定していく必要があるとともに、生徒が課題を解決できるようスモールステップで成功体験を積み重ねさせ、学びを進められるよう授業改善に努める必要がある。



【御指導いただいた先生】

東京学芸大学教職大学院 准教授	浅野あい子 様
狛江市教育委員会 教育長	有馬 守一 様(平成 31 年度)
	柏原 聖子 様(令和 2 年度・3 年度)
狛江市教育委員会 指導室 理事兼指導室長	小嶺 大進 様
	坂本 尚毅 様(平成 31 年度・令和 2 年度)
	角田 恒一 様(令和 3 年度)
	柳田 裕司 様(平成 31 年度・令和 2 年度)
指導主事	吉田 浩幸 様
	平井 政知 様(令和 3 年度)

研究に携わった教職員 令和 3 年度

◎研究推進委員長 ◇研究推進委員

校 長	吉田 知弘	副 校 長	小松 香織
国 語 科	加藤 規子 齋藤 拓真 ◇ 吉田 香		
社 会 科	北島 直翔 野崎 浩 橋本 晋 ◇		
数 学 科	河埜 亮一 ◎ 谷口 典夫 中野 光洋 安井 豊人 ◇		
理 科 科	池田 清信 福島 正恵 丸田 昭男		
音 楽 科	江本 弓子 ◇		
美 術 科	中野 陽子 ◇		
保 健 体 育 科	前田 恭伸 松尾 紗綾香		
技 術 家 庭 科	栗田 命 星野 久美子		
英 語 科	榎本 貴子 千ヶ崎 久夫 西村 景 福長 あおい		
養 護	菊地 幸子		
特別支援学級	春日 知子 佐藤 真人 新田 祐作 ◇		
事 務	工藤 紀子 吉田 恵美子		
一 般 作 業	田代 孝子		
介 助 員	宮澤 和美 余川 眞弓		
副 校 長 補 佐	棚橋 乾		

研究に携わった教職員 令和 2 年度

副 校 長	荒田 勉	養 護	蔦谷 実里	特別支援学級	古賀 優希
特別支援学級	松島 紗耶	介 助 員	関森 梨麻		

研究に携わった教職員 平成 31 年度

国 語 科	坂本 京子	社 会 科	吾郷 珠子	技 術 科	根本 茂夫
英 語 科	曾我 眞弓	特別支援学級	岩瀬 敏郎	介 助 員	伊藤 寿